



名掛丁東名会 梅津恵一

この春からNHKの朝の連続テレビ小説『おかえりモネ』が放映され話題となっている。主人公モネが気象予報士を目指して奮闘する物語であるが、50年程前にも気象予報士を題材にしたNHKの連続ドラマ『風の御主前』（作者大城立裕）が放映されて話題となった。後にそれは小説となって出版された。

明治31年に仙台出身の一人の若者が未開の地、八重山諸島の石垣島測候所に二代目の所長としてやって来た。彼の名は岩崎卓爾、明治2年に一番町で士族の次男として生まれた。旧制二高に入学したのに突然中退して、気象台に就職したという。その理由を知るものは誰もいなかった。石垣島測候所は明治29年に日本南端に開設された。誰もが僻地の仕事を嫌う中この地にやってきたのは、台風の発生源近くで気象観測をしたいが故の依頼配属だった。

彼が赴任した当時、この島では気象台の仕事を理解するものはいなかった。「雨蛙が泣いたら雨が降る」といった言い伝えや、干ばつの際の「祈祷や奇習に基づく雨乞い」に頼る生活習慣が蔓延していた。彼の偉さは島の人たちに、上から目線で科学的知識を押し付けるのではなく、庭で雨蛙を飼育し、また自ら雨乞いの祈祷の生贄になって、いかに効果のないことであるかを証明した。その上で科学的根拠に基づく気象予報がいかに大事であるかを説いた。そのおかげで島の海難事故や台風の被害を軽減することができた。

また島の人たちは長年、薩摩の圧政と貧困に苦しんできたので、日本本土の人たちを「やまとんちゅう」と呼び、警戒心を抱いて容易に心を許すことはなかった。彼もまた仙台藩が戊辰戦争で敗れ、子供の頃に苦難の生活を体験していた。彼は島民と生活をともにし、野や山を探索しているうちに、本土にはない豊かな自然と暮らしの中に特異な伝統文化があることに気が付いた。彼はこの島に生息する生物に固有種がたくさんいることを発見し、捕獲して学会に報告して数多くの新種の認定を受けた。また民謡や伝統芸能にも注目して、地元の若者たちにその取材と研究を手伝わせ、調査に訪れた柳田国男や折口信夫にも働きかけて、東京での披露公演が実現した。本土から来た役人の多くは、明治以降日本国に帰

属したことに馴染めない島の人たちに「立派な日本人になれ」と口先だけで強要した。それに反し、彼は若者たちに八重山は日本の一地方ではあるが、本土に負けない伝統と文化を保持していることを認識させ、誇り高き日本人になることを啓蒙した。

彼はまた気象観測においても、大正9年9月3日午前1時に石垣島を台風が通過した際に、念願かなって初めて台風の眼を観測した。しかし記録的な暴風であったために飛んできた瓦のかけらが右目に当たって失明してしまったが、その後も栄達の道を捨ててこの地に留まり、石垣島の気象観測に大きな功績を残した。

彼はこの島に骨を埋める覚悟で働き、島の人たちから「天文屋の御主前」（てんぶんやのうしゅまい）と呼ばれて尊敬の念をもって慕われた。また彼は袴が下がってヘソが出たまま歩いていることもよくあったが、その姿を見て、子供たちは「ぶすぶか、ぶすぶか」とはやし立て、彼の飾り気のない性格は子供たちにも愛された。

その功績に昭和7年、有志により石垣島測候所の敷地内に胸像が建立された。さらに近年、平成29年には国連の専門機関である世界気象機関が石垣島測候所に対して「百年観測所」の認定を日本で最初に決定した。「百年観測所」とは100年以上に及ぶ重要な気象観測を続けてきた測候所の功績に対する評価であった。岩崎卓爾はその礎を築いた先駆者であった。

岩崎卓爾は120年も前に遠く離れた八重山で気象観測のみならず、島の文化育成に多大な功績を残したが、仙台では全く話題に上る人ではなかった。彼のお墓が荒町の泰心院にあるというので、早速訪ねてみると、墓石には「袋風院卓舟蝶仙居士」と法名が刻んであり、掃除も行き届いて遺族の方が大事にお墓をお守りしていらした。



出典：石垣島地方気象台ホームページ
岩崎卓爾について「岩崎卓爾像と石垣島地方気象台」

参考文献

『風の御主前』大城 立裕／[著] 日本放送出版協会 1974

画像出典

石垣島地方気象台ホームページ 岩崎卓爾について より「岩崎卓爾像と石垣島地方気象台」

URL <https://www.data.jma.go.jp/ishigaki/guide/takuzi/takuzi.html>

